

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-19

グローバル・サモア世界の形成：ホームラ ンドと移民社会の力学

YAMAMOTO, Matori / 山本, 真鳥

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

88

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

191

(終了ページ / End Page)

222

(発行年 / Year)

2021-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024142>

グローバル・サモア世界の形成

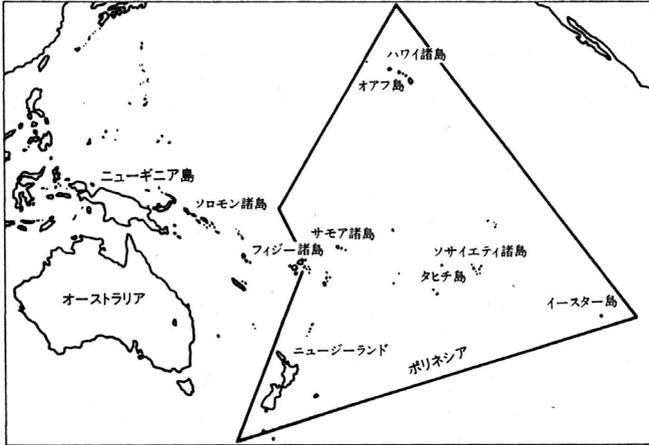
ーホームランドと移民社会の力学ー

山本真鳥

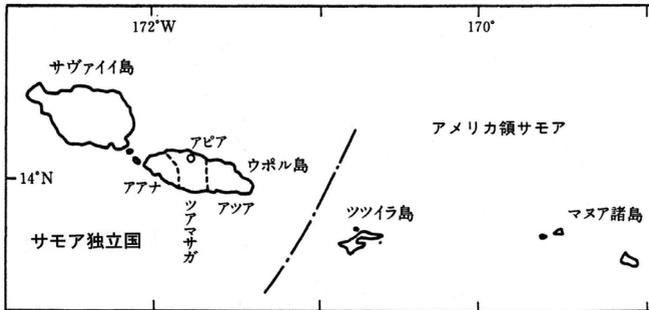
ここで扱うサモアとは、南太平洋の極小国サモア独立国¹⁾が主であるが、隣のアメリカ領サモアも同じ文化圏内に含まれている。第二次世界大戦後に始まる労働力移動の流れのなかで、サモア人たちは世界各地に移民した。現在のサモア諸島全体のサモア人人口は24万人程度(2010年頃)であるが、その数を超えるサモア人が、サモア諸島外に居住している。サモア内外の人々共に、移民する動機は、働いて本国の親族に送金することであり、子どもによりよい教育を受けさせることであると述べている。一方その送金は、少なくともサモア独立国に関する限り、大変大きな意味を持っている。サモア社会のモラルがその送金を支えているが、それを裏打ちするのがサモア文化固有の互酬的な財のやりとりの慣習であった。移民の送金は現在でも重要であり、それで家族も国家も何とかやっていく状況にある。最近では次第にほころびつつある伝統文化の力を補修して、本国文化の真正性を補強している段階であるが、このようにしてつながるサモア人の連帯は、たとえば日系人も含めた日本人全体のつながりからは想像もつかないほど、深い緊密な絆であり、広域に広がるネットワークを生かしたグローバルな社会を形成している。ちょうど近代において国民国家を成り立たせていた想像の共同体(Anderson 2006)にも似ているが、むしろ国家を超えた

1) 西サモアがサモア独立国と名称変更したのは1997年のことである。混乱を避けるためにサモア独立国の呼び名でできるだけ統一しておくが、西サモアと呼ぶこともある。

地図 1



地図 2



ところに想像の共同体を形成しているともいえる。そのような想像の共同体はグローバルに存在し、グローバルにサモアのホームランドを成り立たせている。この論文は、移民も含んだネットワークで形成されたサモア人の世界をグローバル・サモア世界と呼び、その全体像を概観しつつ、ホームランドと移民コミュニティとの間の力学を論じることを目的としている。

1. 2つのサモアとサモア人移民コミュニティの形成

サモア諸島は南緯13度から15度、西経169度から173度の間に位置する諸島——ニュージーランドとハワイを結ぶ線上の前者から1/3の地点に存在する。サモア諸島は概ね一つの文化圏を形成していた。つまり、ひとつの言語と、ひとつの社会システムを共有していた。19世紀後半、合衆国、ドイツ、イギリスの3国は、サモア諸島の支配を巡ってつばぜり合いを演じていたが、1899年にサモア諸島の支配権を巡る内乱が生じたのを機に、植民地経営に意欲的なドイツと、軍港を作る意欲に燃えるアメリカでそれぞれに向けた島をとり、東西に分割して統治することにしたのであった。イギリスは南に位置するトンガを保護領とし、西ソロモン諸島及びアフリカでの利権との取引により身を引いた(Davidson 1967: 31-75; Gilson 1970: 425-433)。

ドイツ領サモアは、第一次世界大戦後、ベルサイユ条約でニュージーランドの委任統治領となり西サモア(現在のサモア独立国)と呼ばれ、第一次大戦後にはニュージーランドの信託統治領となった後、1962年に南太平洋では最初の独立を果たした。一方のアメリカ領サモアは、合衆国の属領となった後、自治は次第に拡大しつつもアメリカ領のまま今日に至っている(山本 2000: 352-353)。

戦後間もなく宗主国ニュージーランドでは、工業化に伴い非都市化地域に居住していたマオリ人(ニュージーランド先住民)の都市への移動が顕著となったが、それでも労働力は不足しており、属領であったクック諸島、トケラウ、ニウエからの労働力を導入し、さらに独立準備を経て1962年以後は独立国となった西サモア(サモア独立国)や1970年までイギリスの保護領であったトンガ王国などからの移民労働者の導入が行われた(Macpherson 2006: 99-102)。長い経過を経て、現在ニュージーランドには、29万6000人もの太平洋諸島出身者(クック諸島、トケラウ、ニウエ、サモア独立国、トンガ王国からの移民)がいる(2013年センサス)がそのうち

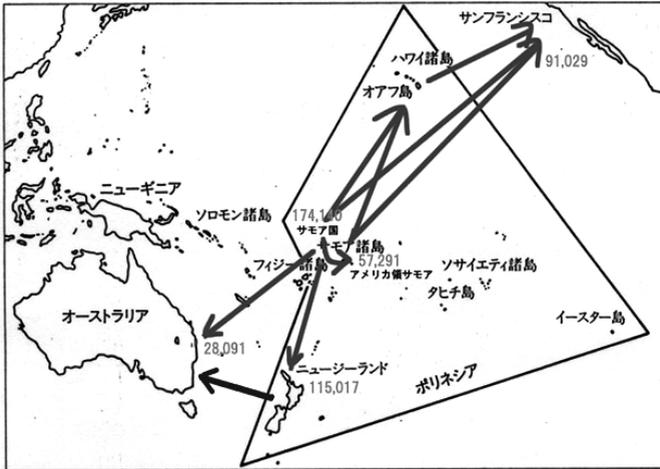
約半数の14万5000人はサモア系の人々である²⁾。一方のサモア独立国の人口は19万6000人（2016年センサス）である。太平洋系の人々の2／3はオークランドに居住している（Pasefika Proud 2016: 2-5）。入国管理はニュージーランドの労働市場によって厳しい時代もあったが、1982年以来毎年割当て人数を1100人と定め、入国を認めている。またフルーツもぎなどの農業労働者も1年のうち数ヶ月間滞在できるビザを2007年から与えるようになった。さらに、ニュージーランド市民権を得るとオーストラリアへも自由に往来できるために、現在ではシドニー、メルボルン、ブリスベンなどにもサモア人のコミュニティが誕生している。オーストラリア全体でのサモア人人口は約4万人（2006年センサス）となっている。

一方のアメリカ領サモアでは、1951年にパゴパゴ湾の米軍基地がハワイのパールハーバーに移転したが、その折にサモア人軍人と軍属、およびその家族が400人近くもハワイに移住し、その後それらの人々は転勤でカリフォルニア等にも住むようになった。これがアメリカ領サモア人の移住熱に火をつけ、その後次々と親族を頼って主として若者がハワイやアメリカ本土に移住した。アメリカ領サモア人は、アメリカの市民権は持たないが、アメリカ国民として合衆国本土への往来は自由であった。アメリカ領サモアはもともと耕作地に恵まれず、基地がなくなったあとには、現金収入をもたらす仕事がない状態が続いたことも移民熱に拍車をかけた（Born 1968）。

その後50年代の終わりには、アメリカ領サモアの開発が始まり、魚肉缶詰の工場ができた。ただしこの工場は労賃も安く、アメリカ領サモア人の移民熱を冷ますことはできなかった。工場は常に労働力不足であり、その空隙を埋めるために、隣のサモア独立国やトンガから移民労働者がやってきた。特に前者は、婚姻等でつながる親族も多く、かつてより往来が行われていたし、文化も同じなので、ごく自然に独立国から人々がやってきた。

2) 複数の帰属を選ぶ人もおり、それを含めた数字。

地図3



サモア移民地図 (利用センサス アメリカ合衆国2000年, サモア独立国2001年, ニューージーランド2001年, オーストラリア2001年)

そうしてアメリカ領サモア人と結婚すれば、配偶者として滞在の権利が生じるし、生まれた子はアメリカ領サモアの市民権³⁾を得ることができる。そしてここを踏み石として、合衆国本土への移住も容易となった。実際に2010年のアメリカ領サモアの人口5万5500人のうち、アメリカ領サモア生まれの人は、3万2000人であるが、父母共外国生まれの人が3万1500人、片親が外国生まれの人が1万4800人であり、アメリカ領サモアは、世代交代とともにサモア独立国の人々がアメリカ領サモア人に変身して行く場所である。そして、アメリカ合衆国にいるサモア人は、どちらのサモア出身かというデータは存在しないのであるが、少なくとも半数は独立国の出身であると推測される⁴⁾。独立国からアメリカ領サモアへの移民も、アメリカ領サモアから合衆国本土への移民も、独立国からニューージーランドへの移民と同様、より高い労賃を求めて生じている。もちろん働く事ばかりで

3) 合衆国の属領であるから、生地主義がとられている。

4) 1980年のセンサスに基づくFrancoの報告から (Franco 1987: 6)。

はなく、さまざまな成功を夢に描いている場合もあるが、労賃の違いは大きい。独立国では、2011年の水準で1日の最低労賃が、20サモア・ドル程度⁵⁾であったが、当時日本円にて1サモア・ドルが40円程度として、800円ほどである。当時のアメリカ領サモアの最低賃金は5USドル以上であったから、8時間で40USドル以上になる。比較を行ってみれば、いかにアメリカ領サモアでの労賃が高いかがわかる。またアメリカ本土の最低賃金はアメリカ領サモアより高いし、職自体の数も多かったから、さらに本土への移住を人々があこがれることがわかる。

サモア人移民は独立国出身の場合もアメリカ領サモア出身の場合も、移民先では都市在住が普通である。こうして、サモア独立国からの移民は、環太平洋の西と東の都市に住んでいる。合衆国では、ハワイ州、カリフォルニア州にまず住み始め、ワシントン州やオレゴン州、アラスカ州にも広がり、モルモン教の布教活動を通じてユタ州にもコミュニティができ、さらにあちこちに拡散中である。アメリカ合衆国のセンサスでは、サモア系の人々は複数帰属も含めて18万4000人を数える（2010年センサス）。

さらにイギリスに移住していたり、ヨーロッパ各地に住んだり、一時滞在しているサモア人（あるいはサモア系ニュージーランド人）もいるので、今や世界各地にサモア人が点在しているのである。

2. 移民の送金、移民の貢献

戦後間もなく、サモア独立国で始まった移民ブームは、主として出稼ぎを目的としたものであった。孝行娘や息子は、海外で稼いで送金するようにと親に言い含められ、また家族への金銭的貢献は当然と考えるので、親や家族のために尽くそうとしたという（インタビュー調査から）。

1980年前後に過去にニュージーランドに渡ったサモア人に訊くと、親に

5) これでもずいぶん上がった方である。

送金する他に、教会へ献金することが目的であるといった人もいた。確かにマノノ島でホストファミリーを引きうけてくれた「お父さん」は、独立前であるが教会建設資金を貯めるためにニュージーランドに渡り1～2年働いたという。またニュージーランド在住の人で、教会建設のためにお金が必要だからニュージーランドに行くようにと親に命ぜられてやってきた、と語っていた人もいる。教会に献金するにしても直接送金するのではなく、親を通して献金が行われたことは間違いないので、いずれにしても親に送金をしたということであろう⁶⁾。

サモア独立国で普段目にしたのは、現金収入のある独身の若い男女は給料を丸ごと家長に渡すことが多い、ということだ。そうすると家長は半分を彼らに小遣いだといって渡し、残りを自分の管理下に置く。それは家計を営むための費用であり、そこから電気代、水道代、食費、冠婚葬祭費用等々を支払うのであった。一方、若者（男女とも）が給料袋を全部持ち帰る保証がないため、家長はしばしば給料日に彼らの職場を訪れ、給料を丸ごと渡してもらった場合もあった。移民で海外に行って両親に送金するのも、同じような慣習に則ったものであるといえる。

独身の若い男女が海外へと移民していくとき、渡航費用を若者やその親が払うのは難しい場合がほとんどである。渡航費用は概ね海外にいる親の兄弟姉妹、すなわちオジオバなどが支払ってくれ、仕事さがしなどもしてくれて、おまけに空港に迎えに来てくれたりする。若い人はそうしたオジオバの家に滞在して、働いて得た給料の多くを本国の家族の元へと送金する（インタビューから）。毎月の送金を行うのは、そのような年若い移民たちである。やがて、結婚する段になると、オジオバの家を出て家族生活を営むために給料を使うことが必要であるという認識に至るので、頻繁な送

6) 教会では、毎日曜の礼拝終了後に長老 (*tiakono*: deaconのサモア語) 世帯毎の献金の金額を毎回口頭で読み上げる。献金額を競うことに人々は異を唱えるが、この慣習はなかなか変わらない。大きな額の献金が行われると、送金があったんだね、と人々は推測する。また2000年になる前は、ラジオで「○○さん、送金に着いたから郵便局に来てください」といったお知らせ放送があるので、誰でも知ることができた。

金がなくなってもホームランドの親族は不平を言ったりしない。ただし、あてにしている送金が入らないのは困るので、結婚を希望する娘や息子の連絡に対して、まだちょっと早いのではないかと、といった回答を親が返すことはしばしばある。しかし、無限に引き延ばすのは無理がある。

結婚すると、年中行事や、フェアラベラベ（次節に詳述）に際して送金するといったレベルの貢献となっても、当然であると人々は考える。実際には、親に送金をするために海外に送られてきた若い人でも、まともに送金もせずブラブラしているものもいるし、一方、結婚してもマメに送金している人もいる。そのあたりの境目はそれほど厳密ではないし、フェアラベラベの請求が来ても必ず送る人もいれば、ときどきの人もいるし、なしのつぶての場合もある。また、親が亡くなってしまえば、送金の相手はホームランドのオジオバになり、その場合には電話やメールでの要望に応えるだけになってしまうことが多い。

サモア独立国の国際収支バランスで見ると、多大な貿易赤字があり、それを埋めていたのが、移民の送金である。1990年頃から観光開発に熱心に取り組んだ結果、サービス収支が大幅に改善してはいるが、さらに存在する赤字は移民の送金でつじつま合わせができていく。例えば2020年11月2日アップデートのサモア中央銀行データ（Central Bank of Samoa Quarterly Bulletin）から、2017年下半期—2020年上半期のデータを見ると、モノの輸出入は7億サモア・ドル台の赤字であり、サービス収支（この多くは観光業収入）3億～5億サモア・ドルで差額を埋めても、なお3億～4億サモア・ドルの赤字があり、第一次所得収支を足すと更にマイナス幅が大きくなり、4億～5億サモア・ドルの赤字である。第二次所得収支（送金収支）で5億サモア・ドル前後の収入を合わせて黒字が実現されている。

移民の貢献はもちろん、家族を意識したものであり、政府を助ける意図がどれだけあるかは疑問であるが、国家としても移民の送金がなければ、とてもやっていけない。個別の家族も移民がいて何とかなっているのであるが、国全体にしてもグローバルなサモア世界の存在があってやっていけ

るのである。

3. 儀礼交換とサモア人アイデンティティ

さて、このあたりでサモアの慣習に触れなくてはならない。先の著書『儀礼としての経済』（山本・山本 1996）『グローバル化する互酬性』（山本 2018）で儀礼交換は大きなテーマであった。サモアではファアラベラベ (*fa'alavelave*) と呼ばれる儀礼（結婚、首長称号授与、葬式、教会落成式など）に際して、親族・姻族同士がサモアで貴重とされる財を贈り合うということが習慣として行われている。

その基本をなすのが結婚式であるが、結婚に際して、花嫁方から花婿方に複数枚のファイン・マット⁷⁾が贈られ、花婿方から花嫁方へかつてはブタやタロイモであったが、現在では現金が贈られる、というように、双方の贈り物の交換により結婚が成立する。

ファイン・マットは、パンダナスの葉をゆでたり、塩水につけたり、天日乾しにしたり、しごいたりして柔らかくし、葉肉をとって細かく裂き、手で斜め平織りに編み込んだものである。かつては、女性がこの仕事に従事し、半年から1年かけて作るものとなっていた。ファイン・マットを含むさまざまなマット類と樹皮布⁸⁾とは女性の作る財であり、トガ財 (*toga* 女財) と呼ばれ、女方から男方へと贈られる財であった。ファイン・マットは、儀礼交換で受領したものを別の儀礼交換で贈与することができるので、人から人へと循環する財である。人類学では、こうした財を「原始貨幣」「限定目的貨幣」「貴重財」などと呼んでいる。

また、タロイモやブタなどの食料、武器類、道具類などはオロア財 (*'oloa* 男財) として、男方から女方へと贈られる財となっていた。ただし、今日

7) 山本はかつて、その現地名であるイエ・トガという名でこれと呼んできたが、政府がこの公
式名をイエ・サモアと呼ぶことを決めたため、ここでは混乱を避ける意味で英名を用いる。

8) カジノキの樹皮を叩き伸ばして作る和紙のようなもの。かつては衣料として用いられた。

写真 1



本国内での葬式でフェイン・マットの贈呈を行う。
撮影：山本真鳥，1980年。

では結婚式で男方から女方へと贈られる財は現金⁹⁾のみと決まっている。結婚式の花嫁方と花婿方とは、トガ財とオロア財をもっとも純粋な形で交換するのであるが、それ以後、冠婚葬祭等の儀礼が他方に生じる度に、トガ財とオロア財をルールに従って混ぜて贈ることを繰り返す¹⁰⁾。財を贈られた方は、それに返礼を行う、という形で互酬的な交換が度々行われるこ

9) 結婚式の際に花婿方から花嫁方に贈られる財がオロアと呼ばれ、ブタやタロイモが主であったことは過去の民族誌的記録 (e.g. Krämer 1994 (1902) 2: 98; Mead 1969 (1930) : 74) の中に見いだせるが、今日婚資がオロアと呼ばれていたことを知る人は少ない。また、贈与に含まれる食料は現金とは別のカテゴリーとして扱われることもある。しかし、大きくはトガ財の反対の財として扱われる (山本 2018: 137-141)。

10) ただし、女方からはトガ財が多めに、男方からはオロア財が多めに贈られる。

とになるのである（山本 2018）。

このファアラベラベは、現代サモア人の大きな悩みである。かつては首長称号名保持者の格がある程度しっかり決まっており、それに沿った財のやりとりというものがあつたが、現在では海外にどれだけ移民を送り出しているかが、鍵を握ることになる。というのも、ファアラベラベで交換される財に、現金や工業製品の食料（コーンビーフや魚肉缶詰、塩漬け肉の樽詰め、冷凍チキンレッグなど）が含まれる¹¹⁾ようになり、結局移民からの送金がどれだけあるかによって、大きなファアラベラベを行い、一族の権勢を見せつけることができるようになったからである。人々は大きなファアラベラベを行うことに熱心になった。ファアラベラベは、単に儀礼の主催者となる親族集団だけではなく、主催者に姻戚関係でつながる親族集団も巻き込まれ、彼らもファアラベラベに財をもって参上しなくてはならない。主催者側はそうした客に敬意を表して返礼を行う必要がある。この財の贈与と返礼のリンクが、イモヅル式に人々をファアラベラベに巻き込んでいくのである。それに伴い、海外移民はホームランドの親族からファアラベラベに参加するための費用を無心されることが度重なることとなった。だから、定期的に生活に必要な送金をする孝行息子や娘がいる一方で、不定期にホームランドの親族から連絡が来てファアラベラベのために送金をする、という人々の果たす役割も重要なのである。

1980年代のサモア独立国では、まだ電話がそこまで普及していなかったので、人々はアピア（首都）の電話局まで出かけて行って、海外の親族に送金を依頼した。電話局に行くと、人々は長蛇の列をなして電話をかける順番を待ち、オペレータが訊ねると人々はコレクトコールを依頼するのが常であった。後に、海外の移民に会う機会に訊ねると、送金だけでなく電話代もかさむので大変だと言っていた。ハワイに移民したある家族は、あまりにコレクトコールが多いので電話代が払えなくなり、電話を止められ

11) 実際には20世紀の初頭に既に塩漬け肉が導入されていたことが記録されている（Handy and Handy 1924）。

てしまったのであるが、これで電話代を払わないばかりか送金もせずに済むので、願ったりかなったりだ、と笑っていた。

1970年以前のサンフランシスコで調査を行ったアブロンは、移民社会ではフェアラベラベは行われていないと述べている（Ablon 1970）が、10年足らずの間に移民コミュニティでもフェアラベラベが行われるようになっていた。移民コミュニティのフェアラベラベには、本国からの参加者（多くは首長称号名保持者）¹²⁾が少数なりとも参加することが望ましく、彼らは航空チケット付きで招待された。そして彼らが渡航するときには、お土産となるサモア独自の食料の他に、必ずファイン・マットを持参し、1ヶ月、2ヶ月とゆっくり滞在してから、帰国の際には移民がくれた現金を持って帰国した。

移民がホームランドで行われるフェアラベラベに参加するとき、彼らは多額の現金をもってやってくるのを常としていた。何かにつけ支払いが必要なときは、それを支払う。また親族がホテル等に集うときの支払いも移民が行うのである。

こうして、移民コミュニティから現金がホームランドの親族に流れ、またホームランドから移民コミュニティへはファイン・マットが緩やかに流れていく道筋ができあがっていた。実際には現金は他のものとの市場交換で消費物資となり消費されていたが、ファイン・マットは消費されることはないので、移民コミュニティに沈殿していった。移民コミュニティではファイン・マットは生産されないので、本国の人々は移民コミュニティでは不足しているに違いないと考えていたが、それは実情とは違った。クローゼットに入れてあるファイン・マットは次のフェアラベラベへの出番待ちであったが、実際に移民コミュニティではファイン・マットが溜まっていったのである。1990年代の調査では、移民コミュニティでやりとりされるファイン・マットは、ホームランドの数倍にも及んでいることが分かっ

12) フェアラベラベの際に演説ができる人の参加が望ましい。

ている（山本 2018: 169-174）。

これらのデータから描けるのは、移民コミュニティからの現金のフローに対して、ホームランドから移民コミュニティへとファイン・マットがフローしたという図式である。直接にファアラベラベを通じてのやりとりもあったが、何かにつけ移民にファイン・マットを贈っていたら、互酬性の論理を通じて何かと現金が入ってくる仕組みとなっていた。こうして現金獲得の手段として非都市化地域では盛んに粗悪なファイン・マットの製造が行われた。

ファイン・マットの粗悪化は私の調査開始時である1978年に既に生じていた。社会内でのファイン・マットの作り手の女性の割合は確実に減っていた。移民の女性はその環境からしてファイン・マットの材料の入手が困難であり、ホームランドで職業に就いている人もファイン・マットを編むことはない。アメリカ領サモアのツツイラ島では、第二次大戦後にファイン・マットを編んでいるところを見たことはない、と人々は証言した。独立国で関わっているのは、主に非都市化地域で現金獲得チャンスの少ないサヴァイ島やウポル島南岸地域の女性たちであった。かつては、1年とか半年をかけて編んでいたファイン・マットであるが、1980年頃のファイン・マットは、1週間ほどで作っており、1990年頃になると3日、あるいは1日で作れるという女性もいた。ファイン・マットには、ラウ・イエ (*lau 'ie*) という品種のパンダナスの葉を用い、繊維を作るための複雑なプロセスが必要であったが、当時の粗悪品ファイン・マットに用いられていたのは、寝具マットを作るための素材ラウ・ファラ (*lau fala*) であり、複雑な加工のプロセスも飛ばし、本来なら1ミリから3ミリ程度の幅に裂いて編むところを、8ミリから1センチ程度の幅で編んでいた。

そのようにしてファイン・マットの量産が行われたのであるが、ファアラベラベを通じてのフローのほかに、団体旅行を通じての財のフローもある。教会や村の青年団、婦人会が、多くは教会や牧師館の建設資金を集めるために、海外の移民コミュニティに団体旅行を行うことがある。旅行に

行くとき受け入れ先は教会となる。教会は信者の集会所などを宿泊施設として用い、信者が食事などの世話をする。旅行団はコノセティ (*konoseti* コンサートのサモア語、ダンスや寸劇などを組み合わせたショー) を行って観客を集め、観客から寄付を募る。受け入れ先の教会にはファイン・マットを贈ることとなっているが、これに対して受け入れ先の教会は集める資金の一部として現金を返礼するのが普通である (山本 1998)。

このような送金に加えてのファアラベラベへの参加やホームランドとの絆の維持は、概ね移民の側からの現金の出超ということになる。また移民コミュニティ内でのファアラベラベの参加についても、二世、三世になると、「何で両親は、お金を持ってでかけて、薄汚れたマットをもらって喜んで帰ってくるのだ？」という思いを声に出して調査者に語ることもよくある。また一世であっても、ホームランドからの要望があまりに理不尽であると思うときもある。そのようなとき、移民コミュニティ内の親族とも連絡を取らずに、無音となることもある。それが続きやがて静かにコミュニティを去る人々もいる。特に配偶者がサモア人でない場合、ファアラベラベの必要性を認めてもらうのは至難の業だ。一方で、コミュニティ内に留まる人は、こういう反応を「ケチ！」というばかりでなく「サモア人ではない！」と断罪する。ファアラベラベに参加するかどうかは、アイデンティティに関わる問題となるのであり、まともに貢献しない人はコミュニティの外に追放となる。

4. 首長称号名と土地所有

移民とホームランドを繋ぐ絆として、ファアラベラベやファイン・マットに加えて、首長制がある。サモアの村は複数の親族集団からなるが、それぞれの親族集団はそれを統括する首長称号名をひとつないし複数もっており、集団を統括する称号名を授与された者は高位首長として集団のリーダーとなる。親族集団のもつ称号名の中でもっとも位の高い高位首長の称

号名保持者が亡くなると、新しくその称号名に就くべき人を親族集団の話し合いで決める。従来は親族集団に所属する男子は妻を娶ってそこに残り、女子は親族の外の人と結婚して、夫方に居住するものだった。前者の子孫をタマ・ターネ (*tama tāne* 男性の子孫)、後者の子孫をタマ・ファフィネ (*tama fafine* 女性の子孫) と呼ぶ。現在もこの傾向は強いが、男性の妻方居住はしばしば行われるようになっている。従来タマ・ターネは所属する村の親族集団の土地に住み、タマ・ファフィネはよその親族集団に住むとされているが、タマ・ファフィネが親族集団の土地に住む可能性はある。タマ・ターネもタマ・ファフィネも共に称号名授与のための親族集団の集まりに参加し、タマ・ターネを中心に居住している親族集団メンバーの中から称号名授与に相応しい人を選ぶ、というのが通常のやり方である。タマ・ファフィネでも居住している場合、選ばれないとは限らない。また適任者がいない場合には、よその村に居住するタマ・ファフィネにお鉢が廻ってくることもある (Marsack 1961)。

そうして高位首長の称号名保持者が決まると、親族集団の共有地 (宅地・耕作地) はこの称号名の下に置かれているので、彼がその土地の名目的な保持者となる。ただし、勝手に好きに使って良いということではなく、高位首長の采配で、親族集団の土地は分割され、親族集団を構成する世帯 (高位首長の配下の称号名保持者であることが普通である) はそれぞれに特定の宅地と耕作地を使用する権利を与えられる。高位首長は親族集団のメンバー全員がちゃんと暮らしていけるようにとり計らう義務がある。高位首長の称号名保持者が交代しても、ほとんどの場合は既に利用している土地の利用権が更新されるだけである。タマ・ファフィネとして親族集団の外に暮らす人も潜在的権利は有するので、その親族集団の下に戻ってきて親族集団全体のリーダーである称号名保持者に頼んで耕作地と宅地を分けてもらうことはできる。移民して海外に居住する人も同様に潜在的権利があるとされる。

サモア諸島ではかつてより、おそらくは人口増加により、首長称号名を

2名以上に分けるということがかつて行っていたことが、村々の称号名リストから知ることができる（山本 2018: 205-219）。これは称号分割と呼ばれている。ただしその慣習が、第二次大戦後に選挙対策としてかなり広範囲に行われるようになったことは、国内でも早くから問題化されてきた（Marsack 1961: 6; Western Samoa Parliament 1979）。国会へ代表者を送り出す選挙において、称号名保持者のみが投票できる制度であったために、高位称号名保持者は自分に投票してもらうべく称号分割を盛んに行い、次々と称号名保持者の数を増やして、対抗馬との戦いに勝利しようとした。しかし、称号分割は選挙のせいばかりで生じていたわけではない。選挙のために称号分割を行うことに歯止めをかけるために選挙制度を変更して1990年に普通選挙を導入したにも拘わらず、称号分割の動きが止まなかったことからそれはわかる。称号名を持つことは、親族集団の土地に対する権利を不動のものとし、一族をなすことであったから、かつての称号分割は親族集団のもつ土地の分割も伴っていた。しかし、近年の称号分割は、独立国の首都アピア在住者や、アメリカ領サモア在住者、海外移民に与える場合が極めて多い。アピアで働く役人などは、称号名保持者であることがステータスの証でもあるから、土地所有と必ずしも結びつかない称号名授与も受け入れるのが普通である。海外移民の場合も、移民コミュニティで称号名保持者であることは一定の尊敬を集めることになるので歓迎だ。また、土地の権利と結びつかない形で外国人に称号名を授与することもかつてより行われていた。

称号名授与を行う村在住の親族集団の論理としては、授与を行うことで、最低限、称号就任式でそれらの名士が現金をばらまいたり、食料の配布を行ったりということが期待できる。がそれ以上に都市在住者や海外移民の場合、フェアラベラベの度に送金や現金を持っての来訪が期待できることがある。フェアラベラベは親族集団の名誉に関わることなので、村在住の親族集団の側からは、現金をもたらす人々とのつながりは重要である。

ではそのような、現金をばらまくという損な役回りを、都市在住者や移

民たちはなぜ引きうけているのであろう。もちろんそれを損だと思って、ファアラベラベの知らせにも無音を貫く人々もいるが、毎回必ず参加する人もあり、何回かに1度参加するという人もいる。多く耳にしたのは、そうしたつながりが、いざというときの保険だという発言である。ある移民は次のように語った。「そんなことが起こるとは限らないが、私自身や子ども達、そして甥や姪がサモアに行きたいと望んだ場合、彼らは私が称号名保持者であることを主張して、つまり父親が称号名保持者であったとか、おじさんが称号名保持者であったと主張して、いくばくかの土地を親族集団から分けてもらうことができるのだ」と¹³⁾。

村在住の親族集団の面々は、そうしてファアラベラベにまめに貢献する称号名保持者には、息子の代にもまた称号名を授与するかもしれないが、何も貢献しない称号名保持者の子孫には、次の代には称号を与えないという決定をすればいいだけのことである。かつてであれば、称号名授与に伴い、土地の分割が免れないのであるが、現代にあっては称号名だけの授与が可能であり、そうして海外在住者からファアラベラベへの貢献を引き出す手段となっているのである。それが海外在住者にもホームランドとの絆をキープしておこうと考えるだけのインセンティブになっていることはなかなか興味深い。そのようにしてグローバル・サモア世界が広がって行く。

5. ファイン・マツト復興運動

ファアラベラベやファイン・マツト、首長称号名授与、といったものは、海外移民をどれだけホームランドに惹き付け、それとの絆を維持させることができるのであろうか。そのあたりにほころびが出てきているのは、ファイン・マツトにおいて著しかった。

ファイン・マツトはかつての美しさを失い、粗悪な「裸の王様」である

13) 近親に首長称号名保持者がいることは、その親族集団に所属することの証となる。

ことを移民二世が罵倒したように、薄汚いぼろマットとなったときから危険そのものであった。かつては一枚一枚広げて、人々に誇示するように見せながら贈呈されていたファイン・マットが、10枚1束にくくられて、若者が担いで渡すという方法がとられるようになったのはいつ頃からだろうか。私が最初に目撃したのは、89年のホノルル調査の際である。92年にサンフランシスコ湾岸でのアメリカ領サモア出身者の葬儀でも多数のファイン・マットが10枚1束で扱われているのを目撃し¹⁴⁾、93年のオークランド(ニュージーランド)調査でも同様であった。その頃オークランド在住の人類学者に訊ねたところでは、すでに大量のファイン・マットを贈り合うピークは過ぎたとのことだった¹⁵⁾。数は少ないが、サモア独立国のファアラベラでも10枚1束の贈与は目撃されている。

また1970年代には、ファアラベラベの現場で人々は1枚を10サモア・ドルとして換算していたが、1980年代の終わり頃には1枚5サモア・ドルと換算するようになっていたので、明かにファイン・マットは供給過剰で「値下がり」していた。1990年代までには、標準型である従来のサイズ(200cm x 120cm程度)の数倍の大きさのファイン・マットが使われるようになった。敬意を表明する印として、大ファイン・マットを1～3枚贈り、その後10枚1束をいくつか贈る、というスタイルでファイン・マットの贈与が行われていた。教会の信徒団にまとめて小を10束とかいうとき、牧師には大ファイン・マットを3枚に小10束、あるいは5束といったことになる。大ファイン・マットは大きいだけで、質は同じである。ただし大きくて手間もかかるので価値が高いし、大きく広げた時には威圧感がある。大ファイン・マットは、もちろん始めから作られたものもあるかもしれないが、

14) 互酬的交換を通じて最大限2500枚が集まった。

15) C.マクファーソンの談話。ピーク時に目撃した最大は1万2000枚。93年当時は多くて1500枚から2000枚程度とのことだった。私がオークランドで目撃した葬儀で扱われたのは200～300枚程度である。彼の話では、ともかくファイン・マットが移民コミュニティに集まりすぎていて、教会の青少年合唱団の競技会を行う際に、賞品をファイン・マットにしたところ、大変不人気だったという。

写真2



ホノルルの葬式でファイン・マットの束を送る。撮影：山本真鳥，1989年。

写真3



オークランドのファアラベラベで大ファイン・マットを贈る。撮影：山本真鳥，2009年

小ファイン・マットをいくつか組み合わせて補修してある場合があるということもサモア人自身も認めている。大ファイン・マットの登場は、多少なりともファイン・マットへの関心を人々に喚起したかもしれないが、概ね、グローバル・サモア世界の中で、ファイン・マットは人々の興味を呼び込まなくなっていたに違いない。それこそ称号名を移民に数多く与えたために、称号名から稀少という魅力が失せつつあったのと同様、どこにでもある厄介者としてファイン・マットもその魅力を失いつつあったのではなかろうか。とりわけ移民コミュニティの人々は、ホームランドからファイン・マットを持参して現れる人々を心の底から歓待するということとはなくなっていたであろうことが覗える。

このファイン・マットのあり方を大きく変えたのは、サモア独立国側の変化である。始めは1990年代初頭にWiBDI¹⁶⁾というNGOが文化復興を目指しつつ、女性の現金収入獲得を推進するという趣旨で、ファイン・マット本来の目の詰んだ細くて薄い繊維で作るものの製作を始めたことに由来する。女性たちが作っていた粗悪品ファイン・マットの技術ではとても作れないのであるが、古来の作り方を知っている老女に教えてもらったり民族誌の記述を参照したりなど試行錯誤を繰り返しながら、ワークショップを重ね、編み手を養成した努力は目を見張るものがあった（フィールドワークより）。

そして、WiBDIの請願に基づき、2002年5月の母の日にファイン・マット復興運動と編み手を讃える演説を首相が行い、この運動が公的に認められることとなった。政府は真正なファイン・マット、イエ・サエ（*ie sae*）の増産をめざし、女性・共同体・社会開発省（MWCSO）が所管官庁として、村の婦人会などに働きかけを行った。また、首相は、粗悪品小ファイン・マットを「醜い」ラーラガと呼び、ラーラガをファアラベラベで用い

16) Women in Business Development Foundationという名称でスタートしたが、後に、Women in Business Development Incorporatedという名前に改称した。ここでは便宜的に後者の名前で通す。

るのは止めようと国民に呼びかけたのである。

人々は、そのためにラーラガは一掃されたと首相の一声の重要さを強調するが、フェアラベラベで金銭を浪費するのは止めよう、という首相の発言は無視されており、首相の演説だけでそのような事態が生じたとは考えにくい。むしろ、ラーラガがほとんど価値のない醜いものであることが露呈し、次第に移民が振り向かなくなっていくということがあるのではなかろうか。

新しくイエ・サエと命名した政府規格の真正ファイン・マットは、1人の女性が半年とか1年かけて作るほど緻密なマットであるが、従来と違って女性が現金収入を得るために編むというコンセプトが新しい。イエ・サエは1等級から3等級までであるが、1等級が2011年頃には4000～5500サモア・ドルほどであった。もちろんラーラガであっても表向きはともかくとして実際は市場取引が行われていたのであるが、それはフェアラベラベに間に合わせるための半互酬的といってもよい村内でのやりとりであった。

写真4



政府の肝いり政策で作ったイエ・サエ。撮影：山本真鳥，2011年

しかしイエ・サエの場合はきちんとした商取引である。とりわけ1年に1枚の生産ともなれば、収入を手に入れるまでの編み手の生活維持の問題があるが、WiBDIを介して契約すると、この組織が買い手から毎月分割払いのように払い込み金をあずかり、編み手の仕事ぶりに即して給料のように支払っていくという方法をとるので、生活資金としても安定した収入が見込まれる。現金収入の得にくい非都市化地域の女性の中には、この収入で子どもを中等学校に行かせたりした例もある。

ただし、生産はすべて手仕事であるから、作ることのできる枚数も限られ、また大層高額なものであるために、買い手も限られるということが問題である。また次第に現金収入目当てで編み手が増加していく中、2017年のイエ・サエの展示会では、あまりに枚数が多く、政府の賞金も総額では大変な額に登ったという。役人の間からも来年は同額ではやっていけないかもしれない、という声も聞こえた。当然値崩れが起きているように見えた。

しかし、イエ・サエの美しさは格別である¹⁷⁾。もともとファイン・マットはごく限られた儀礼的コンテクストで開陳され贈与されるのであり、その後人々は持ち帰ったら次にそれを誰かに贈与するときまで、たたくで大事にしまっておくものである。贈与するときに両端を2名で持ち広げて相手方の方に歩いて行くその間、そよ風に揺れ、はためく10秒か20秒だけ、それとわかる瞬間である。贈る側も受ける側も見ている人たちも注目し脈拍が上がる。イエ・サエの場合、大変高価であるということがあり、購入した極上のものを人々は父母や自分の葬式のため仕舞っておくようで、フェアラベラベに出回るといことがあまりない。2017年の短い滞在中も、人々はフェアラベラベではあまり見ない、といていた。ラーラガには振り向かなかった海外コミュニティに住むサモア人も、サモア文化の真正ファイン・マット、イエ・サエの獲得には興味を持つに違いない。

17) この間、ファイン・マットの製作をサモア独立国の無形文化遺産としてUNESCOに認定してもらった運動をしていたが、2019年にこれが認められている (Wilson 2019.12.20)。

6. 文化政策と観光開発

サモアでツーリズムの振興が始まったのは1990年代であった。それ以前から、話は時々出るものの、政治家やインテリは概ね懐疑的であった。というのは、もともと客人歓待の文化はあるが、それは儲けを度外視した歓待であり、客を迎える人の尊厳に関わるものだからだ。客に仕えてサービスを売る、というやり方はサモアの文化にはそぐわず、サモア人の尊厳やモラルに反するという考え方から、従来の政治家達は無視を貫いていた (Meleiseā & Meleiseā 1980)。しかし、観光で高収入を得る他の太平洋諸島を横目で見ながら、観光大臣ツイラエパ¹⁸⁾ は、現金収入を得る道として観光開発を計画した。『宝島』で有名なスティーヴンソンのかつての館を、アメリカにあるこの作家愛好者の財団にまかせて博物館とし、観光局とタイアップして行事カレンダーを作った。その空隙になった9月の最初の週には、テウイラ・ツーリズム・フェスティバルという行事をもってきた。初回は1991年であった。

このフェスティバルは、伝統的ダンスや合唱、教会の聖歌隊、クリケットやボートレース¹⁹⁾ などのサモア独特のスポーツ、ファイア・ダンス²⁰⁾ 競技、サモア式漫才など、これらはすべて競技会方式で行われ、1位から3位までが決まる。また、昔行われていたゲームや、樹皮布作りやマット編みの実演なども行われる。一連の行事の締めくくりとしてミス・サモア・コンテストが組み込まれる。最終日には花などで飾り立てたピックアップ・

18) 1998年にトフィラウ首相の辞任に伴って首相となり、2021年1月現在も首相を続けている。経済開発重視の立場をとる。

19) クリケットはイギリスとイギリスの旧植民地で盛んなスポーツである。サモアではルールや試合運び等に独自の進化を遂げて、キリキチ (*kilikiti*) と呼ばれて親しまれている。ボートレースは、ファウタシ (*fautasi*) という40人以上で漕ぐ伝統的な戦闘用カヌーであり、現在では主に村同士の競走用に使われている。

20) ファイア・ダンスは第二次大戦後のサンフランシスコでポリネシアン・ダンスを見せていたサモア人ダンサーが開発したアトラクションである。たいまつのような両端に火のついた彼らがナイフと呼ぶ武器を振り回して踊るアクロパティックなダンスで、ポリネシアン・ショーには欠かせない。

写真5



政府ビル正面で開催されたダンス競技会。撮影：山本真鳥，1996年。

トラックのパレードが行われ、その後の表彰式でフェスティバルは終了する。観光開発計画やフェスティバル開催の趣旨もオーストラリアやニュージーランドから観光客を呼び込むことに主眼がおかれていた。しかし、これらの行事を心底楽しんだのはサモア人自身であろう。もちろんそのように意図したわけではないと思うが。

テウイラ・フェスティバルが始まったときには、伝統的なダンスだけで丸1日費やして競技会が行われた。見に来ていた白人観光客も最初拍手をしていたが、30分もしたら出て行ってしまった。現在では5～6分で交代するが、数が大変多いので3時間程度はかかる。やはり白人観光客の姿を見るよりは、現地の人や海外から見に来たサモア人が見ていることが圧倒的に多い。つまり、サモア文化にある程度精通し、ポーズの取り方や新しい所作などを知り、それぞれの団体の品定めができるような人でないと全時間を通しては楽しめない催しになっているのである。またサモア式漫才など、サモア語でやるのであるから、ある程度サモア文化に通じた人類学者にも理解するには難易度の高い演技である。当然、一般の観光客には向かない。ボートレースにしても、アピア・ハーバーで競争を見ている人の

間に白人観光客はほぼ皆無である。

もちろん現地のサモア人はこの行事をフルに楽しんでいると思うが、それ以外に、サモア人の里帰り訪問やこの行事を見るために来る移民もいる。ただし、彼らは見た目では現地人と区別はつかない。サモア独立国の統計資料によれば、入国目的として「友人・家族訪問」をあげる人が多いということがこの国の特徴としてあげられる。私自身が2000年代に行った研究では、「友人・家族訪問」を申告した人が観光目的の入国者より多いのである。例えば2004年の入国者10万人のうち、友人・家族訪問は3万5000人(35.1%)に対して、観光は2万9000人(28.9%)である(Yamamoto 2009: 60)。最近のデータでは2017年の入国者数15万8000人に対して、友人・家族訪問が5万1000人(32.2%)、観光は6万4000人(40.4%)となっている(Samoa Bureau of Statistics 2018)。観光客は以前より増えているが、依然として友人・家族訪問は多い。つまり観光客には、ホームランドの人々に加えて、里帰り中のサモア人が多く含まれていると思われるのである。

1990年頃までは、たとえ移民であってもサモア人の行動は里帰りそのものであり、ファアラベラベのために帰国して親族の元に泊まり、ついにかつての大家族の暮らしに戻ってゆっくり時を過ごしていたものだが、次第にサモア人移民も観光客と似た行動をとるようになってきた。概ね移民は長期滞在となることが多いが、1ヶ月もいるうちには、親族と一緒に暮らす大家族の暮らしに疲れ、ちょっとしたプライバシーを確保するために、数日間ホテルに滞在したり、昼に町に出かけてマクドナルドで昼食をとったりなどの行動が見られる。また、レンタカーを借りて、滝や潮吹き岩など観光名所を廻る姿も目にする。2010年代になると特定の親族の元に泊まる代わりに、始めからホテルに泊まる人もいる。90年頃にレストランに行くと、客は白人ばかり(観光客とサモアで仕事をしている人)だったが、昨今ではローカルの人々や里帰り移民も全く気後れせずに食事をしている。

さらにフェスティバルで興味深いのは、移民コミュニティからの参加が

写真6



ダンス競技会のためにアメリカ領サモアから来た少女たち。撮影：山本真鳥，2009年

しばしば見られることだ。アメリカ領サモアから少女だけのダンスグループが来て参加するのも見たし、ニュージーランドの白人も含んだ合唱グループが来たこともある。またミス・サモア・コンテストには常に、ニュージーランドやアメリカ合衆国のサモア人コミュニティからの参加がある。コミュニティ代表がミス・サモア・〇〇を伴ってサモアに来るのである。例えば、ミス・サモア・オークランドとか、ミス・サモア・ユタといった具合である。

つまり、このサモア文化祭とでもいうような催しは、ある意味でグローバル・サモア世界の中心を作り出すことに成功している。9月第一週にサモアに行けば、サモア文化に触れることができ、ダンスや歌を見物し、お土産やローカルな料理に舌鼓を打つこともできる。さらに、素晴らしいサモア・ダンスや、合唱を聴き、競技会に参加することすら可能というわけだ。

実は、テウイラ・フェスティバルが始まる以前、1980年代の終わり頃、

写真7



ミスサモア・コンテストたち，2003年

サモア独立国を訪れる度に、人々のダンスの力量は落ちていると感じていた。私が最初に調査に訪れた1978年には教会の資金集めなどに青年団がコノセティ（コンサート）を開き、そこでいろいろな出し物を披露していたが、とても上手なファアタウパチ (*fa 'ataupati*)²¹⁾ やマーウルウル (*mā 'ulu 'ulu*)²²⁾、サーサー (*sāsā*)²³⁾ など、さまざまな形式のダンスを組み合わせで見事に踊ってくれる子どもから青年までの姿に感動したものであ

21) スラップダンス、モスキート・ダンスとも呼ばれる。体のあちこちをパチパチ叩きながら踊る男性のダンス。

22) 女性だけ、男女、男性だけ、と列を作って踊るダンス。

23) 座って踊るダンス。

24) 親族集団の女性称号をもつ女性。かつては未婚の女性がこれを務めたが、現在では結婚・未婚や年齢にあまりとらわれない。ダンスの時のタウポウ役は、それほど厳密には決められていない。

25) タウポウのソロダンスで、ダンス会の最後に踊られるものであるが、他のダンスが振り付けがあり、そろって踊る練習も必要とされるのに対し、こちらはタウポウ役の女性が即興で優雅に踊り、廻りに集まった人々が、それを引き立てるような所作をする、というもので、練習がいらぬ。

る。しかし、次第に資金集めのコノセティと言っても、親族集団毎にタウポウ (*tāupou*)²⁴⁾に見立てた女性をたてて、その女性を中心に踊るタウアルガ (*taualuga*)²⁵⁾でもって、献金を募る形式が多くなってきて、見物人にとっては退屈なだけのコノセティとなっていた。テウイラ・フェスティバルのダンスの競技会には賞金も出るというので、村や教会、学校毎のダンスグループにとって1位となることは、賞金もさることながら大変な名誉であるから、人々の熱の入れようは半端ではなかった。村毎に出し物を調整し、半年も前から1週間に何回か、夕方集まって練習をしているので、本当に見事であった。

テウイラ・フェスティバルのおかげで、ホームランドの人々はそれぞれの村や学校、教会でのコミュニティ活動に熱心になり、ダンス、合唱、クリケット、ボート漕ぎなどのスキルは上がった。あたり前ではあるが、サモア独立国がグローバル・サモア世界の中で真正なサモア文化の中心であることを証明し、海外移民の目を集めることができるようになった。

6. むすび—サモア文化の真正性

国民国家の枠組みを越えて存在するグローバル・サモア世界の全体像を描いてみた。サモア独立国は人口約20万人程度の太平洋の極小島嶼国である。土地は豊かであるから、サブシステンス（自給自足）の生活は何とか維持できるとしても、グローバリゼーションの時代に、輸入物資の支払いに充てるだけの輸出品がない。第二次世界大戦後には、海外に移民を送り出し、移民からの送金で何とか国家財政を維持してきた。また個々の家族にしても、親族集団の威信を維持するための儀礼交換を行うために、移民からの送金を必要としてきた。移民との間に仮想であれ互酬的なやりとりを行う装置として、ファイン・マットの贈与と首長称号名の授与が用いられてきた。ファイン・マットは質を下げることで数を増やし、また首長称号名は同じ名前を称号分割により数を増やして授与してきた。

しかし、そのような手段もそろそろ難しくなりつつあったのが20世紀の最後の10年であろうか。本物志向のファイン・マツト復興運動と観光開発が始まったのが、ちょうど時期を同じくしていることに注目したい。サモア独立国の政治リーダーたちが、どれだけ戦略的にその問題を考えているかは不明であるが、両方ともサモア文化の真正性を高める方向に向かっていくことは興味深い。美しいイエ・サエはサモア文化の神髄として移民達の心をとらえるかもしれない。また白人たちが興味をもつ以上に念入りの観光開発により、移民たちもサモアを訪れることに興味をもつはずである。もう送金ほしない二世、三世も、ルーツ探しには興味をもつし、祖先の土地を訪れ、本物のダンスを見たり、ボートレースを応援したりするかもしれない。これらのいわば伝統文化復興の運動により、再び海外サモア人の目をサモアに向けさせ、グローバルに散らばるサモア人をつなぎ止めることが可能になるのではなかろうか。

献辞

この退職記念号に寄稿するにあたり、これまでの研究を縦断的にとらえられるテーマを探した。その結果、長きにわたったサモアのフィールドワークの成果の一部となるような論文が書けたのは大変うれしい。これまで、筆者のフィールドワークを財政的に支援してくれた東西センター（ハワイ）、トヨタ財団、日本学術振興会、法政大学に感謝し、国立民族学博物館の筆者が参加した共同研究会を始め、多くの刺激を与えてくれた研究指導者、研究仲間に御礼を申し上げます。中でも欠かすことができないのは、研究に必要な情報を提供してくれたサモア独立国政府や、サモア国立大学、ネルソン図書館、数限りないサモア在住や移民コミュニティのサモア人友人への感謝であり、彼らの協力なしにこの研究は成り立たなかった。

文献

- Anderson, Benedict (2006) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition. London: Verso.
- Born, Ted Jay (1968) American Samoans in Hawaii: A short summary of migration and settlement pattern. *Hawaii Historical Review* July 1968: 455-459.
- Central Bank of Samoa (2020) *Quarterly Bulletin 2020.11.2* [https://www.cbs.gov.ws/index.php/statistics/quarterly-bulletin/\(2021/1/閲覧\)](https://www.cbs.gov.ws/index.php/statistics/quarterly-bulletin/(2021/1/閲覧))
- Davidson, J.W. (1967) *Samoa mo Samoa: The Emergence of the Independent State of Western Samoa*. Melbourne: Oxford UP.
- Franco, Robert W. (1987) *Samoans in Hawaii: A Demographic Profile*. Honolulu: The East-West Center.
- Gilson, R.P. (1970) *Samoa 1830-1900: The Politics of a Multi-cultural Community*. Melbourne: Oxford UP.
- Handy, E.S.C. and W.C. Handy (1924) *Samoan Housebuilding, Cooking and Tattooing*. B.P. Bishop Museum Bulletin 15, Honolulu: Bernice P. Bishop Museum.
- Krämer, Augustin F. (translated by T. Verhaaren) (1994) *The Samoa Islands*. 2 vols. Honolulu: University of Hawaii Press. (Original in German: *Die Samoa-Inseln*. Band.I (1902), Band II (1903)).
- Macpherson, Cluny (2005) Pacific Peoples in Aotearoa/New Zealand: From sojourn to settlement. In *Migration Happens: Reasons, Effects and Opportunities of Migration in the South Pacific*, edited by Katarina Ferro and Margot Wallner. New Brunswick: Transaction Publishers.
- Marsack, C.C. (1961) *Notes on the Practice of the Court and the Principles Adopted in the Hearing of Cases Affecting (1) Smoan matai Titles and (2) Land Held According to Customs and Usages of Western Samoa*. (revised edit.) Apia: Government Printer.
- Mead, Margaret (1969) *The Social Organization of Manu'a*. B.P. Bishop Museum Bulletin 76. Honolulu: B.P. Bishop Museum. (first published in 1930)
- Meleiseā, M & P.S. Meleiseā (1980) “The best kept secret” : Tourism in Western Samoa. In *Pacific Tourism: As Islanders See It*, edited by F. Rajotte and R. Crocombe. Suva: the Institute of Pacific Studies, The University of the South Pacific.

- Pasefika Proud (2016) *The Profile of Pacific Peoples in New Zealand, 2016*.
<https://www.pasefikaproud.co.nz/resources/?start=24> (2020/9/1閲覧).
- Samoa Bureau of Statistics (2018) *Statistical Abstract 2017*. Apia: Samoa Bureau of Statistics, Government of Samoa.
- Western Samoa Parliament (1979) *Parliamentary Paper 1979, no.13*. Apia: Legislative Department.
- Wilson, Soli (2019/12/20) Ie toga recognised as international icon. *Samoa Observer* (Newspaper)
- 山本真鳥 (1998) 「フィールドノート・サモア移民の「伝統的」団体旅行」『法政大学多摩論集』14: 257-288
- 山本真鳥 (2000) 「近くて遠い隣人たち—近代史の中の西サモアとアメリカ領サモア」吉岡政徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究—接触と変貌, 住民と国家』民族学博物館研究報告別冊21: 347-374.
- Yamamoto, Matori (2009) Migration and Tourism Development in Samoa. *People and Culture in Oceania* 24: 51-66.
- 山本真鳥 (2018) 『グローバル化する互酬性—拡大するサモア世界と首長制』東京: 弘文堂
- 山本泰・山本真鳥 (1996) 『儀礼としての経済—サモア社会の権力・贈与・セクシュアリティ』東京: 弘文堂

The Formation of the Global Samoan World:
The Dynamics of the Homelands and Overseas Migrant
Communities.

Matori YAMAMOTO

《Abstract》

The migration flow started from the Independent State of Samoa – the New Zealand Trust Territory until 1962 and the Independent State of Western Samoa until 1997 – after World War II to cities on both sides of the Pacific, such as Auckland, Wellington, Los Angeles, Honolulu and San Francisco. The population of Samoans in the Samoan Islands, including the Independent State and American Samoa, is about 240,000 (around 2010), whereas more Samoans than this number live all over the world outside the Islands. The focus here is on the reciprocal transaction between migrant Samoans and their relatives in the homelands. While money as remittances flows from migrant communities to the homelands, ceremonial valuables, fine mats and chiefly title names flow from the people of the homelands to the overseas emigrants in return. Mostly, people at home give valuables on certain occasions while emigrants give money in return. The money flow from the migrant communities is crucial for the independent nation as well as for the people at home to survive. Recently, the government of the Independent State of Samoa is encouraging the revival of traditional culture in order to enhance the authenticity of the homelands as the cultural center. The author calls the whole integrity of the homelands and migrant communities ‘the Global Samoan World,’ which appears as an expanded ‘imagined community,’ whereas ‘imagined community’ usually denotes a nation state.